

第一次沼津倉庫株式会社

沼津通運倉庫株式会社の前身沼津倉庫株式会社は明治 35 年(1902)6 月 30 日に設立された。

本店所在地 沼津町城内 365

資本金 20,000 円

役員 社長 和田 伝太郎(初代)

取締役 和田 二三郎 杉山 周蔵

中村 安之助 河辺 良太郎

(注) 明治 41 年、和田社長長男貢実氏が父名を襲名し 2 代社長に就任す。

本社の所在地は現在の丸運ビルから東南、敷地面積は 1,200 坪位であった。現在の丸運ビル正面の道路は後に作られたもので当時にはなかったものである。

当社は和田伝太郎氏の設立した沼津銀行の傍係会社として設立され、当時は日清戦争後の産業界勃興の反動から起こった全国的金融恐慌が漸く終息した時点で沼津では繭乾燥会社の破産の事件等があり、其の後 37 年には日露戦争の勃発をみるに至った。

大正 2 年 2 月 10 日、資本金 40,000 円に増資

大正 9 年 5 月 1 日、新会社日東精麦倉庫(株)に参加するため解散した。

しかし、旧沼津倉庫株式会社の施設一切はそのまま新会社の運送倉庫部として従来通りの営業を行なった。

新会社、日東精麦倉庫は、倉庫施設としては 2 号倉庫を新設したのみで数年後には合理化のため精麦部を切離し、(第二次)沼津倉庫株式会社と再び改称して現在に至った。

第二次沼津倉庫株式会社はもとの第一次本社事務所に戻り、昭和 4 年白銀町移転まで営業を続けたのであって、第一次沼津倉庫株式会社は一旦会社を解散した形をとったものの、実質的には継続して第二次の沼津倉庫株式会社となったものである。

(注)沼津は江戸に近い地方市場の中心地として興り、明治時代は問屋、御用商人等による貸付資本や商業資本によって占められ、産業資本 工業都市化の興隆を見なかった。遠州の織布、富士の製紙のような伝統産業からいち早く日本資本主義の第一次産業革命に適応して工業化に発展した都市に比較し、沼津は消費的な城下町宿場から生産都市への転換がおくれ、大正 3 年(1914)に始まった第一次世界大戦による好況時代に入ってから漸く軽工業の確立を見る事になった。



初代和田伝太郎社長

第二次沼津倉庫株式会社

大正 12 年 5 月 27 日、精麦事業を切離して社名を N 沼津倉庫株式会社と改称す。

本社は沼津町城内 365 におき再びもとの沼津倉庫株式会社に戻った。大正 13 年 7 月 28 日、安達俊助の社長辞任により次の役員構成となる。

社 長 和田 伝太郎(2代)

取 締 役 安 達 俊 助、 杉 山 周 蔵、 渡 辺 康 一

岡 本 市 郎 平、 長 沢 一 之 輔、 諏 訪 敏 夫

監 査 役 安 達 兼 太 郎、 北 川 伊 助

(注)安達俊助氏昭和 15 年死去

営業は第一次沼津倉庫株式会社にそのまま戻り、新会社の新設した側線 2 号倉庫は本社の白銀町移転まで日東精麦専用に賃借した。

社名、沼津通運倉庫株式会社と改称

A. 輸送と保管の一貫体制発足

昭和 24 年 3 月 5 日 資本金を 2,000,000 円に増資

昭和 25 年 7 月 23 日 資本金を 3,000,000 円に増資

社名を沼津通運倉庫株式会社と改称する事を議決す。

昭和 25 年(1950)7月23日定時株主総会に於て沼津港運送株式会社を買収合併する事を議決し7月25日登記された。

全日、沼津通運株式会社の買収も議決された。

商号を沼津通運倉庫株式会社と改称し、通運事業、倉庫業、貨物自動車運送事業、海運業、港湾運送業、旅客貨物扱業及び保険代理業を営業する事を議決した。

役員は次の通りである。

取 締 役 長 沢 義 夫(専務)、 小 柳 茂(常務)

石 神 福 次(常務)、 永 倉 進、 真 野 隆

栗 原 豊、 真 野 た 糸

監 査 役 杉 山 三 四、 野 村 芳 衛

(注)石神 常務 昭和 26 年 1 月 5 日辞任

小柳 常務 昭和 27 年 11 月 22 日死去

真野 た糸 昭和 34 年 1 月 31 日辞任

此の年（昭和 25 年 6 月）朝鮮動乱勃発し 28 年（1953）6 月まで続き、アメリカ軍持需は日本の戦後のインフレ収束政策下のデフレ経済に多大の影響を与えた。

B . 沼津港運送株式会社

明治 15 年（1940）松崎の依田佐二平氏によって依田汽船が創られ、西伊豆海岸に就行、そのころ東京湾汽船も下田以西に延ばして来て明治 38 年より両者共同して配船を行なった。下田、小下田、妻良、子浦、松崎、田子、安良里、宇久須、土肥、戸田（妻良までが日帰り航路）寄港地で陸上交通が極めて不便であったので伊豆の繭、木材、天草、木炭、牛乳等の産物、主食、日用品並びに旅客で航路は大いに繁昌し、大正 3 年（1914）ごろは毎日 2 回の発着で隆盛を極めた。

当社は御成橋（当時は港橋と呼ばれた）上方が内港で、芹沢、加藤という二人共同の“ニビキ”（二）の商号の回漕業者があったが、依田汽船資本となり“二”沼津回漕店として汽船、機帆船の代理回漕業を行っていた。

昭和 19 年（1944）に至ってニビキ回漕店は鈴与系の沼津港運送株式会社となった。

内港は御成橋上方から下方に移り、更に下って下河原に移っていた。

昭和 20 年の戦火によって沼津港運送株式会社は焼失したのを機に千本、沼津港（現当社沼津港営業所）に移転した。

沼津港運送株式会社は東海汽船（元東京湾汽船）及び伊豆箱根鉄道株式会社（元依田汽船）の両方の代理店業務を扱って居たが沼津港への移転の際、東海汽船代理店は須田桂一氏が独立したので伊豆箱根鉄道株式会社のみ代理店となり、昭和 25 年 7 月、当社に併合、継承された。

沼津港運送株式会社は東海汽船株式会社に会社所有の 130 番地内に代理店事務用地を賃借していたが、東海汽船代理店は昭和 42 年（1967）2 月、東海汽船株式会社を継承した静岡観光汽船株式会社が伊豆箱根鉄道株式会社に合併された時、当社の北岸壁上の倉庫、事務所（旧沼津通運、本社）と交換して、代理店事務所を取払った後も、須田氏は須田売店として住宅兼店舗を建築して一部敷地を使用していたが賃借契約、地代の授受ないまま買収撤去された。

伊豆箱根鉄道代理店業務は戸田、土肥、八木沢、宇久須、安良里、田子、仁科松崎港の旅客貨物を取扱い、午前 9 時半、午後 3 時発の二航海であった。他方、東海汽船は午前 6 時、正午発であった。

41 年（1956）代理店業務返還（当方より提起）時期に到り 6 月 30 日を以って契約を解除した。同時に 30 年 6 月より伊豆箱根鉄道船舶部に使用せしめていた北岸壁上の県より

D . 沼津港

沼津港は昭和 8 年（1933）12 月 8 日起工し、同 12 年 5 月 31 日（1937）竣工した。和田伝太郎氏等の力による所が多かった。

太平洋戦争中は木造船による軍需品の発着に大いに利用されたが戦後は商港並に漁港として活発を極めた。沼津港運送株式会社が移転して来た頃であり伊豆一帯の貨物は総べて沼津港に発着した。

伊豆産の木材、薪炭、天草等は沼津港より貨車に積換え、消費地へ送られ、沼津港に集まった主食、肥料、飼料、日用品等は伊豆各地に送られた。

戦後当分の間、工業燃料の主力は石炭であって遠く九州若松より船に満載した石炭が相次いで入港し更に工業が復興した昭和 27 年頃（1952）よりパルプ用原木の松丸太が種ヶ島、屋久島、淡路島、四国等より連日到着し岳南地区に原木の山を築いた。セメントが盛んに到着したのもこの頃からであった。

当時は鋼船全くなく全て木船であり 200～300 屯積める大型木船が花形であったが、航海に日数を要し素朴な船員も其の風体は海賊さながらであった。

まだ荷役も真に幼稚であり薪炭はかぎのついた天びんで担ぎ上げ石炭はスコップでバケツにかき込んで吊り上げた。

昭和 37 年（1962）頃から様相が変わり伊豆の道路網は整備され、バス、トラックに押され伊豆向け船積み、雑貨は減少、パルプ材は田子の浦港に移り逆に観光客は急激に増え港内は客船で賑う様になった。沼津港は狩野川河口を利用した港であるため増水の都度水路が変り、船長及関係者の苦労は大変なもので、座礁する船もしばしばあり積荷を放棄した例もある。

経済成長の成果は船舶及貨物にも当然現われ、入港するものは殆ど新しい鋼船となり貨物も化学工場の原料、又は化学液体、重油類が主要となった。

沼津港の狭隘と水深の不足は現代の大型化に合わず船は満潮時に合わせ漸く出入港する状況であった。

斯かる状況の到来を早くより予見した地元貨物業者並に漁業関係者は沼津港湾振興会を作り、県当局に新港建設の猛運動を展開し昭和 32 年（1957）より着工の運びとなり昭和 44 年（1969）の工事を以て岸壁は殆ど完成、2,000 屯までの船舶入港が可能となり一部荷役が開始された昭和 45 年には 50 屯クレーン他陸上施設が建設され、10 月 16 日竹山静岡県知事の来沼を得て開港式が行なわれた。

（注）江の浦港 昭和 27 年頃より 37 年上期まではパルプ、パルプ材及び澱粉の船おびただしく、船体も大型により、沼津港に入港しきれず江の浦港を盛んに利用した。

当時の江の浦港は現在の如く整備されていなかった水深は沼津港より大であった。



永倉進社長

永 倉 進 氏

永倉進氏は永倉精麦株式会社の社長であって、全国精麦工業協同組合連合会の初代理事長として要職に在った。当社に就任したのは昭和 25 年 2 月 20 日であるが、森田豊寿社長の昭和 22 年 7 月辞任以来、実質的には社長の立場にあった。

其間、森田昂専務、つづいて長沢義夫専務をおき、戦災後の復旧を指揮してその卓越した経営手腕で沼津通運倉庫の体制をつくり、更に次の段階に飛躍する時、昭和 26 年 12 月 11 日突如として病没されたのであった。享年 54 才、惜しみて余りあり、会社にとって甚大な衝撃であった。

氏の性格は実に厳格、緻密であったが、誠に温情の深かった人であった。平素は仕事以外の事は何物もなく、事業一本にうちこんでいた。しかし折りにふれ社員と共に仕事から全くは離れて一刻をすごす事を非常な楽しみとしていた。

会社では港営業所の座敷でうなぎやまぐろの料理で時おり会食したが、その時が最大に

幸福そうであった。

職員のお世辞などには耳をかさなかったが、スケールの違いでおせじの方がその影をひそめ通用しなかった。

御殿場駅、裾野駅及び下土狩駅の通運事業免許がその時期におりたのであったが、社長急逝のため前2駅は辞退した。

ここに特筆すべきは社長の報酬、役員賞与等は社業基礎固めの為全く支払われた事はなかったことである。

初夏の候愈々御降昌之段慶賀至極に存じ上げます
搜而弊社は昨年七月沼津驛及沼津港驛に於ける通運事業經營の免許を得て同年八月一日營業開始以來新免店各位の絶大なる御支援と御引立により日に増し業績の昂上を示しつゝある事を茲に厚く御禮申上げる次第であります、今回新に御殿場線下土狩、裾野、御殿場の各驛に於ける通運事業並に静岡縣下一田に互る貨物自動車運送事業(地場運送)の特免を得ましたので今後は此の基礎の上に立つて更に一層公共の福祉増進に全力を傾注し以つて通運事業本来の使命達成に微力を致し度是非共貴下の御協力と倍舊の御愛顧を切に御願してやまぬ次第であります、時將に盛夏を迎ふるとき御社折角の御健闘をお祈りすると共に重ねて「新免店は新免店へ」を強調して御挨拶に代へる次第であります

昭和二十六年六月

沼津市本字白銀町一八三ノ三

日通支許
加置店

運

沼津通運倉庫株式会社

取締役社長 永倉 進

丸 運 ビ ル

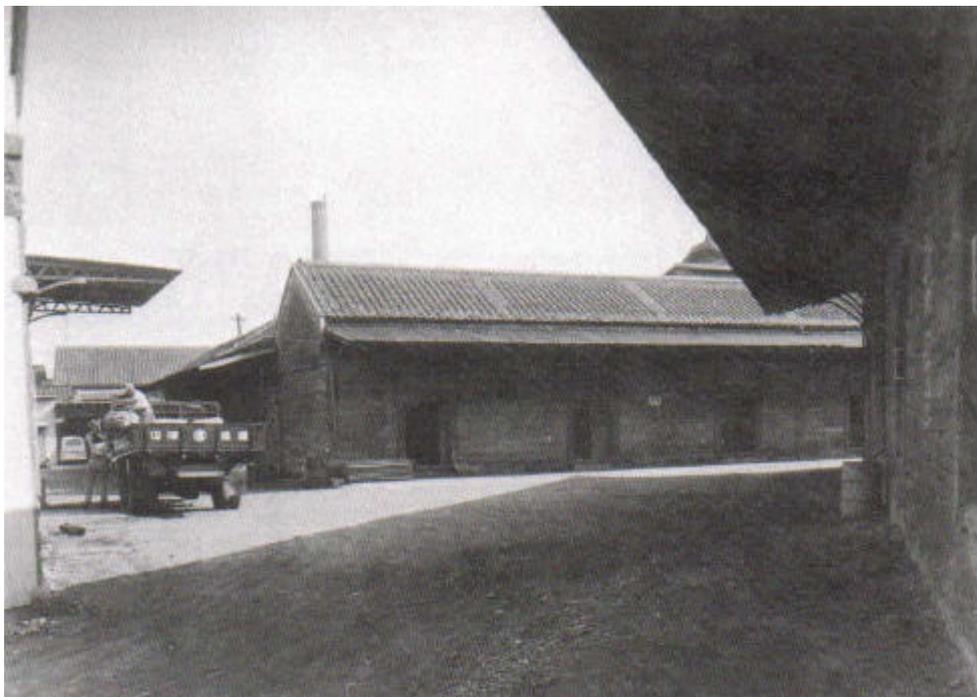
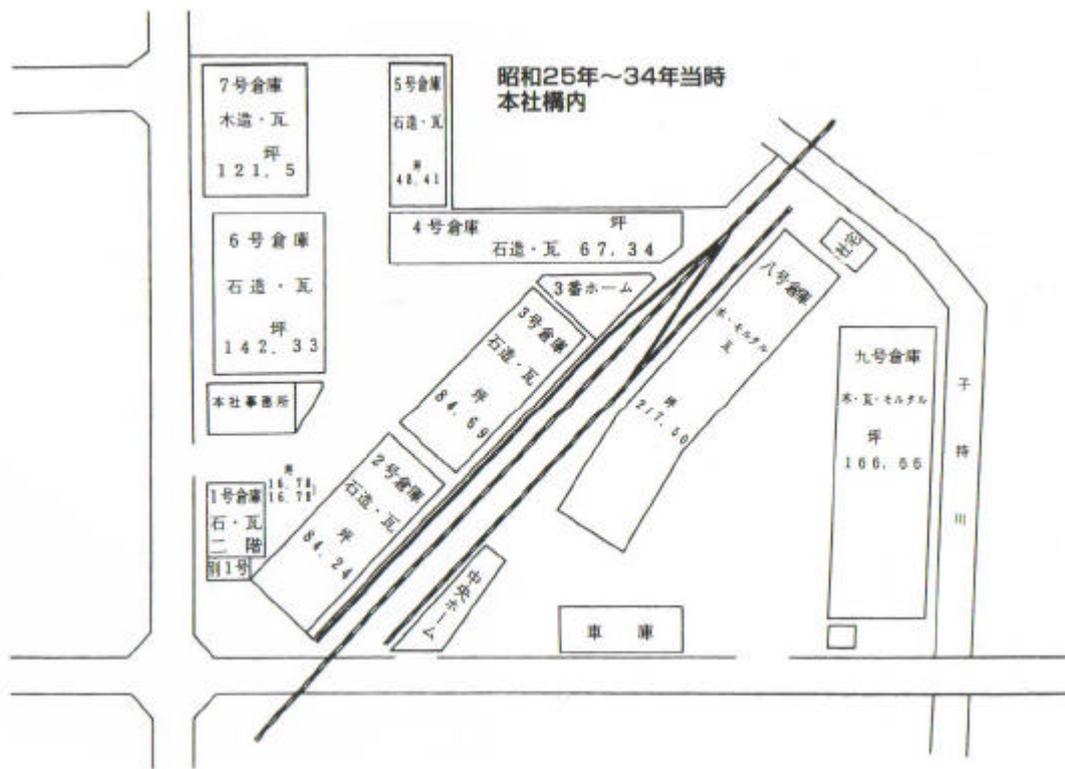
昭和 34 年（1959）9 月、丸運ビル完成

住宅公庫及び県公社の融資により清水建設株式会社の設計、施行で建設。地下 1 階地上 4 階建店舗、居住ビルで建坪（総坪）285 坪、総工費 2,800 万円、1 階に日本交通公社、2 階に静岡ラジオ、静岡新聞社が入居した。

沼津市のビル建築としては地区最初のもので市長より市街地美化のため貢献大であると表彰された。



沼津駅前、丸運ビル



側線西側倉庫 右手前より2号、3号、正面4号、4号の奥が5号、左手前が6号、その奥に7号

倉庫の近代化

A . 8 号倉庫の完成

昭和 35 年 (1960) 5 月新設

戦後のインフレ收拾のためデフレ政策下の経済の低滞は朝鮮動乱の勃発後、次第に日本経済、産業の復興から発展に進み貨物の動きは活況を示し倉庫増幅と旧式倉庫の改造の要求が強くなり、当時日本精工(株)会長であった望月乙彦氏の肝煎りにて日本興業銀行(一部中小企業金融公庫代理貸)の長期の資金に係り清水建設施工、昭和 35 年 5 月に 8 号倉庫として新築完成した。鉄筋コンクリート 2 階建、側線倉庫で本格的近代倉庫の当社第一号である。建設地は旧 8 号倉庫あとで、旧 8 号は売却した。

8 号倉庫建設に先だって、子持川添いにあった(新 8 号倉庫地)旧 9 号を一部を切り捨て昭和 34 年 10 月移動して南側道路ぞいに変えた。

移動工事は内野建設が行なった。

この旧 9 号倉庫は後に 45 年 3 月改造のため取りこわされた。

(注)昭和 36 年、倉庫は全国的に不足し、特に産業の成長に伴い近代倉庫の不足が甚だしかった。

B . 低温倉庫設置

昭和 36 年 6 月 6 号倉庫を改造して低温設備す
工事は三島市幸原、鈴木建設工業
低温設備は菱電商事株式会社沼津営業所施行。

低温設備第 1 号で後に新 8 号倉庫の内 2 室を菱電商事施行にて低温設備す。

C . 新 8 号倉庫完成

昭和 38 年 12 月 8 号倉庫に引きつづいて新 8 号倉庫が清水建設施行にて新築完成した。

沼津地区工業第 1 号として昭和 33 年に進出した東レに続き第 2 陣として昭和 36 年長泉町に東邦ベスロンの誘置が決定、かくて大工場の進出は目ざましく、ことに 35 年進出を明らかにした住友化学を中心とした石油コンビナート建設計画は、昭和 38 年東駿河湾工業整備特別地域の指定を受けてより具体的に進行するなど、県東部圏の工業化は本格的に展開してきた。工業原料製品の流通が急速に増加の一途を辿り昭和 30 年ごろ 60~85%を占めていた政府保管米、麦の比率は此の頃逆転するようになった。

D．アクリロタンク設置

昭和 38 年 11 月、港 130 番地に三菱化成工業株式会社の東邦バスロン工場向けの原料アクリロニトリルの貯蔵タンク（500 K L）が完成。タンカー荷役と保管管理並びにタンクローリー車輸送業務を行ない、初めてタンクローリー車を運行する事になった。建設費は三菱化成工業株式会社で一切負担し、工事は千代田化工株式会社が施行した。

E．苛性ソーダタンク設置

昭和 44 年 12 月、千本港町 130 番地上の三名商会所有の石油タンクを譲り受けて徳山曹達株式会社の苛性ソーダ貯蔵タンク（600 屯）に改造。タンカー荷役と保管管理並びに主として大昭和製紙工場向けタンクローリー車の輸送を行なう。改造は徳山曹達株式会社が一切負担施行した。

F．鉄骨造倉庫

昭和 40 年 10 月 西間門に西駅 16 号倉庫（木造モルタル）完成。木造倉庫は 16 号を最後に、17 号よりは引きつづいて鉄骨造りとなった。

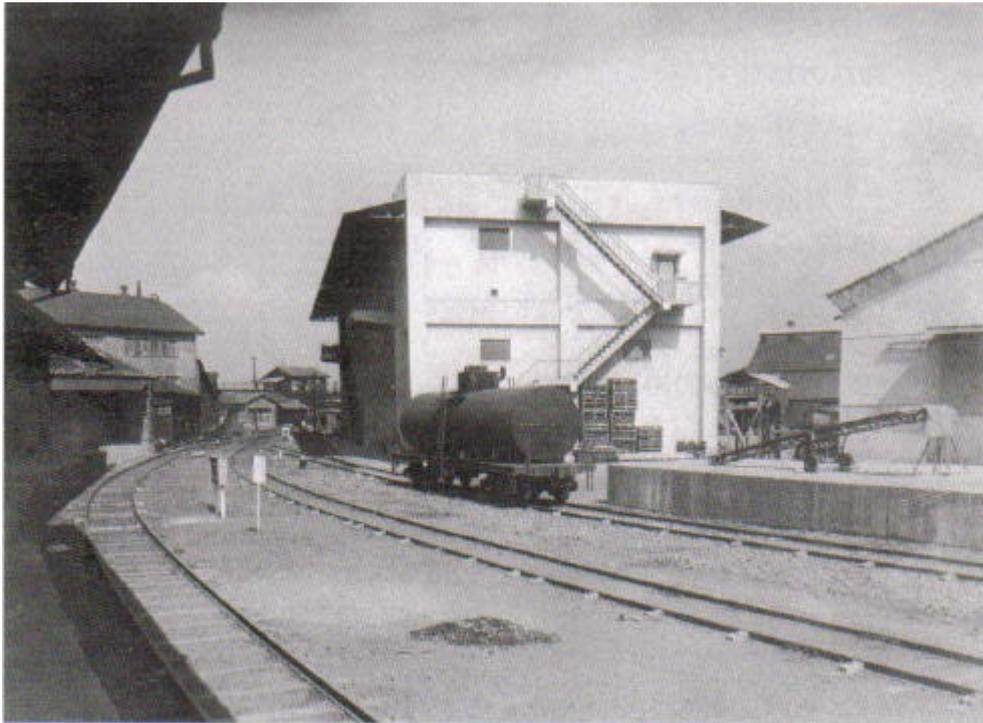
昭和 42 年 6 月 西駅 17 号倉庫新設。
鉄骨造り倉庫第 1 号である。 内野建設施行。

昭和 43 年 6 月 西貨物駅前に西駅 18 号倉庫新設。 内野建設施行。

昭和 43 年 11 月 本社構内 5 号倉庫を鉄骨造倉庫に増改築。 裾野町、渡辺建設施行。

昭和 44 年 11 月 港 11 号倉庫鉄骨造倉庫に増改築。 内野建設施行。

近代倉庫の新設、低温設備と並んでタンク設置等流通革新の進行に対処すべく此の間長期資金導入して努力を払った。



8号倉庫

沼津地区工業化の展開期

- 昭和 35 年 石油コンビナート計画具体化。公害問題で結局実現出来なかったが地区工業化に大きな影響を与えた。
- 昭和 38 年 東駿河湾工業整備特別地域指定。
- 昭和 39 年 8 月 東名インター開通にさきがけ将来に備え岡宮地先に 1,000 坪の土地を取得。
- 昭和 41 年 6 月 伊豆箱根鉄道株式会社船舶代理店契約解除（別記）
- 昭和 41 年 7 月 港売店の拡充改造。
- 昭和 43 年 8 月 2 日 長沢義夫常務死亡。
- 昭和 43 年 12 月 港車庫新設。 内野建設施行。
- 昭和 43 年 12 月 下土狩営業所新築移転。
- 昭和 44 年 3 月 31 日 東名高速沼津インター開通し、5 月 26 日全線開通。
- 昭和 44 年 4 月 25 日 新幹線三島駅開通
- 昭和 40 年ベトナムの動乱拡大、米軍の北爆開始に伴い日本の政治経済は大きな影響を受けるに至った。

40年(1965)より44年(1969)にかけての経済は大型景気(いざなぎ景気)と総所得は世界第三位となり、日本人は海外よりエコノミック・アニマルと呼ばれる様になった。

44年7月米国のアポロ11号は月に着陸し、人類が初めて月を歩いた。一方、日本の学生ゲバはあれ狂った。

昭和45年2月21日 営業第二課、港営業所に移転

昭和45年9月20日 社名改称20周年(創業68年)記念行事実施

昭和45年9月21日 本社新社屋にて営業開始、9号倉庫完成。

昭和45年(1970)3月アジアに始めてEXPO'70(万国博)大阪にて開催。さきには(昭和39年)オリンピック大会を東京にて開催、つづいて万国博と、日本の成長を大いに世界に示した。

下土狩営業所

昭和26年下土狩駅の運転免許が下付されるとともに、永倉精麦(株)所有の駅前建物を賃借し下土狩営業所を開設した。当初は同社の米の配給所で木造建物であったが、35年10月に鉄筋二階建のモダン建物となった。この改築の時ツバメが軒下に巣を作っており工事の延期も不可能、こわすにもしのびず向かい側の日通の建物の庇に子ツバメごと移して無事巣立させた。

当初通運は100%永倉精麦の発着物で占め多忙を極めた。倉庫保管貨物は大麦、小麦のみで永倉精麦と富士製粉(株)(原三業構内)のものだけであったが富士製粉の焼失と大麦の需要減退により倉庫が空いてきたので一般貨物の保管に力を入れ、三島ニュースに広告を出す等スペースの充実に鋭意努めた。

昭和32年東洋レーヨン(東レ)の工場建設が始まり、建設資材で保管、運送は活況を呈し、工場運転後は原料の扱いも重なり、併せて地区工業化の貨物増しにより、次第に主食に代わって一般商品が大部分を占めるようになった。最初は車輛皆無であったが、東レ建設ごろよりトラックを投入、大型5台、小型1台をみるに至った。

倉庫建物は当初から大部分な永倉精麦所有の同社原料保管倉庫を賃借し(約1,000坪)営業してきており、当社の発展には大きな力を与えてきた。

(注)下土狩日通は昭和18年(1943)5月21日に下土狩合同運送合資会社(永倉進社長)を併合したもので建物は永倉精麦所有のままであった。昭和27年(1952)当社が下土狩営業所設置の際譲り受け更に昭和44年日通に譲渡した。

下土狩合同運送は当初、三島丸通(店主清水町田代氏)の作業員詰所であったが(本店現農協

マーケットあたりの地)昭和9年(1934)12月丹那トンネル開通による東海道線三島駅新設と共に同社が移転したあと永倉精麦経営の丸久運送店(渡辺久作店主)が譲り受け“下土狩通運”下土狩合同運送合資会社となったものである。

下土狩駅は旧東海道三島駅であったが熱海沼津間東海道線編入のため昭和9年12月1日御殿場線下土狩駅と改称された。



下土狩合同運送合資会社

本社社屋及び9号倉庫新築

新社屋建築、9号倉庫増改築工事は45年(1970)2月16日、旧9号倉庫に於いて地鎮祭を行ない着手した。

施行は清水建設で、中小企業金融公庫静岡支店、日本興業銀行東京支店及び駿河銀行、静岡銀行の長期融資により、同年9月21日竣工、同日より新社屋に移り営業開始、本社所在地は白銀町180-1となった。

新9号の完成によって荷役の合理化、ことに巻取紙のクランプリフト作業は貨車、倉庫、トラックの連繋作業に一大威力を発揮し更に500坪増により画期的に業績に寄与することになった。

社名改称20周年(創業68年)記念事業

A. 物故歴代社長並に役員、従業員慰霊法要

昭和45年9月20日(日曜日)物故歴代社長、役員、従業員の遺族の方々を招待し、新

設 9 号倉庫 2 階にて佐久間真忍（蓮光寺）導師並に沼津仏教会長、木村光顕（本光寺）上人により役員、従業員、参列して厳肅に法要をいとなみ追悼、顕彰した。

式 次 第

1. 一同着席
2. 導師入場
3. 開式の辞
4. 導師の献香 一同起立合掌礼拝
5. 追悼のことば 社長
6. 三帰衣文（斉唱）
7. 導師表白文
8. 読 経（観音普門品偈）
9. 焼 香
10. 回 向
11. 思ひ出寸話 清水清二氏
12. 社長謝辞
13. 閉式の辞 営業部長
14. 一同合掌礼拝
15. 法 話 導師
16. 霊前へわが社のモットー斉唱
17. 20 周年記念事業発表 総務部長
18. 導師退場



追悼之辞

本日社名改称 20 周年の記念日を迎えるにあたり歴代社長役員従業員物故各位の霊を慰む可く沼津市仏教会会長、同副会長をお迎えし茲に御供養の儀を相営むことが出来ますことは関係者一同大いなる意義を感じるところであります。顧みますれば明治 35 年初代和田伝太郎社長御創業の時より 68 年、名も「白銀町」の佳き地に幾多の苦節を重ね今日施設の近代化も着々進み新たな信用を築く可く本社屋の完成を旬余に控えることが出来ましたことは偏えに各位の霊の無言の御鞭撻の賜にてまことに有難く身の一層引締まるを覚える次第です。

一次、二次、三次計画は幸い完成をみる事が出来ましたが、今后四次、五次の諸計画をも残し剩つさえ流動極まりない昨今の世相をかえりみます時まことに企業経営の責は重く減価償却コスト、資本コスト、その他問題意識の発揚を一層ふまえ決意を新たにしておく所存であります。

加えて従業員諸氏も息長く我が社のモットーを忠実に履行することにより各位の霊に報いてくれるものと信じて居ります。

茲に謹んで壇上各位の霊安かれと御冥福を折り併せて社業の発展を祈念し追悼の辞といたします。

昭和 45 年 9 月 20 日

11 代社長

永倉芳郎

歴代社長、御尊名

初代社長	和田伝太郎氏(初代)
2代社長	和田伝太郎氏(2代)
3代社長	安達俊助氏
4代社長	和田伝太郎氏(2代)
5代社長	和田長三郎氏
6代社長	杉山周蔵氏
7代社長	横山 定氏
8代社長	森田豊寿氏
9代社長	永倉 進氏
10代社長	永倉きく子氏
11代社長	永倉芳郎氏
12代社長	永倉 聡氏(現社長)